

LICENSED PRODUCT

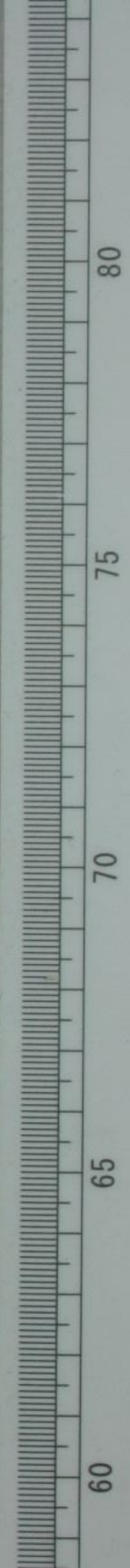
KODAK Color Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



蘇子齋
其角

~ 5
1898
/ 止



60

65

70

75

80



玄城お始^りと^りき^き方^方復^復寸^寸微^微志^志
 ち^ちき^きみ^みの^の色^色の^のね^ねも^も年^年の^の時^時を^を得^得次^次本^本を^を
 む^むり^り物^物架^架あ^あ千^千晋^晋子^子翁^翁乃^乃萩^萩
 乃^乃露^露君^君元^元禄^禄六^六年^年に^に編^編集^集し^して^て
 予^予の^の祖^祖翁^翁奈^奈々^々の^の時^時も^も出^出て^てけ^ける^る年^年復^復
 序^序を^を併^併物^物て^て其^其校^校集^集の^の中^中に^にか^かつ^つ
 ら^られ^れる^るさ^さき^きの^の平^平砂^砂と^とい^いつ^つ傳^傳名^名を^をい^いて^て
 入^入集^集に^にす^する^る一^一枚^枚なり^{なり}と^とや^や予^予に^にま^まり^り

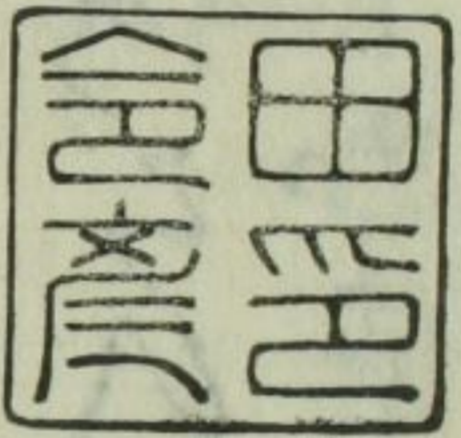


東籟乃名を借てかの集を尺の
二も全本を元以讀といも傳寫
の訛をくふかるる也平に於此
ひさ川なり今親族に於平
傳する印本あれをとて平
發部して本又ちりた由同好の
人乃きらめしむる也又明年
元禄^{甲戌}乃歳旦を得り

あれ又東籟のを以てあま
吟れをいふもいふも
あまのよはらひ又あま
合刻——出書率——平筆
されを思ふの諸君門生も
傳吟をいふも印行
補せりよりて其あま
を——いふも——明和

壬辰秋年仲冬中浣日

博約翁自為叙



みづのほとけより 仲秋の月け身を
よらぬいさよとゆびおとてい
ハ深川の芭蕉庵よりうららぬあはれ
あつた一軒の露法師の草花^{ハナ}のり
ひらりまきからぬ新く歳^{トシ}ののしみ
あはれなこころあはれ一也はをむす
うけくくくくくくく 船河野山
よあ

百里千里 糶を奉り

十のちよと喰ひしり

とれを父病

去るく遊をばあ

さるくおる千里燕す

名月ハ十歩子 錢を握々索

其角

祢を相蔵とがの所の言

仙化

御所のとを帯を置々斬りて

嵐雪

かよつても申の帰る時

神叔

とれを石と強り 河原市

介我

つよきををかすのす海後の水

松風

おの末の末の末の末の末

桃都

おの 驟きて格返 穴

津隣

松外を何〜〜〜焼火乾 鉄松

陰を凡る〜〜の津極環の本 芝蓮

真次カタヨに傍るカタヨ影を〜〜ゆりし 素牙

障〜〜〜の通る白雨 平砂

木の筋を同く念は〜〜入らる 可圃

米ぎ〜〜〜〜〜 萬卷

門多の字世ハ益の十三日 東潮

つら〜〜〜〜〜 牛角

瓢覃ムクゲの委乃うらハ茶か〜〜 赤飯

小倉境をゆ〜〜〜 挑腰

温純臨沙肌脱キの祖アラハなり 仙化

お乳う〜〜〜文の照ニイナひ 分我

髪ゆりぬ虫歯と〜〜〜 万巻

嘗て〜〜〜猫〜〜〜 素牙

江島わむむ四方を痛乃花送り 平砂

ち〜〜〜〜 其角

了也ハ探幽

曉の紅をまきし白牡丹 介我

金を費ツイエしり 通る屏の戸 仙化

刃渡せえ喜ツリのうり也野馬神 桃儀

紅雲 掛し中居を談 神叙

大酒ハ移し一撃未練ハ 介我

鼻息中ちるを焼ハの灰 万巻

三松乃手掛ハらモラヒ 神叙

かなしミラミ 駒ミすの依 貌コイ 素手

いつ人子赤子の白いおらん 其角

踏しはあも海長橋 夔ス 夔我

棟梁の樞をカしス 平砂

料ニラ理ニラをニラさニラしくニラ 仙化

魚ニラ一ニラおニラ精ニラのニラ章ニラ 桃儀

肉桂 万巻

草枕 其角

あまのののを 平砂

病家の例とて

四吟

華乃井の海船と醤油搦
 三年月よハ萩殖乃虫
 月をぬみ細末かけり笠隠し
 ちおしをうを酒子半きる
 ちとつみ拵ハ款中打まり
 夕日よのぬる籠のてりこを

仙化
 介我
 其角
 非叔
 乱
 化

買カフを袖か〜〜はなはる風
 か〜〜志ハの打摺をさる
 傷戸子垢き火もゆるかもひは
 好まを拵る帯乃仕おひ
 以てんハ〜〜ぬをほ隅田川
 若のハ魚馬を鳥啼也
 札賣のさきけよ垂よ床の上
 体相さく用心の連

叔
 角
 化
 我
 角
 叔
 化
 叔
 我
 化
 叔
 我

秋今一多節を下の殿の言 ケタ 角
 荒絲ぐうの音さうかみ 叔
 指乃尖のせんハハハ流きこり 我
 阿トサキ 海鳥の呼ハハッ 子の新 化
 蟬丸ハ月の也キ くらり 死乃を 叔
 心の氣おめ庭のあま 角

八月十日

あまのこゝろ三吟

葉也詮たささの甲よあつと 神叔
 キノコ 香子菌の 生はあ輝 其角
 及リ 及る魚ハ輝 奮を死トキ 介我
 ナキ 帆也とれを時也月 叔
 船あ 思今を流さんなり 角
 ナロ 舟もわ下す 店の本 我

十たごうしちを^{シキ}印ハ他おのし牛
伏をよ似し存翁の香隠を
物^{ニキ}尔乃霜の中より虹立ち角
口^ニ糸すごとと石佛の歌文
瘰の意泪こほしんを
者お娘とく人のちおづる牛
皆舟と四季の田業の候月
秋の冬おのち^{ツキ}枝突角

焼るまいつく本おまうくび館牛
隠おの賣ハ酒をやきさ玉
くおわつくお中とむおんえ
江戸乃たえんのお掃く也夫
桐崎いさうりし^{ツキ}お龍田越屋
村切の結香ハ行陰の玉牛

夕月や香るらんらめ乃庭の松桃鄰
新月や色けりまき一罍の鴟素子
名もくさくさ下のはらふ山 東嶽
の鳥月えいつくろくく 西可圃
名もくさくさお猫のわはらゆ 芝蔴
名月や惜お襖フスマのこころあやせ 平砂
名月やけりほ生の輝もおやゆ 幸隣
名月やうさひ扇の 骨をうりう 秋

みくらこのあそいころのきねんを
うさくさくさくらのねえよあつりぬ

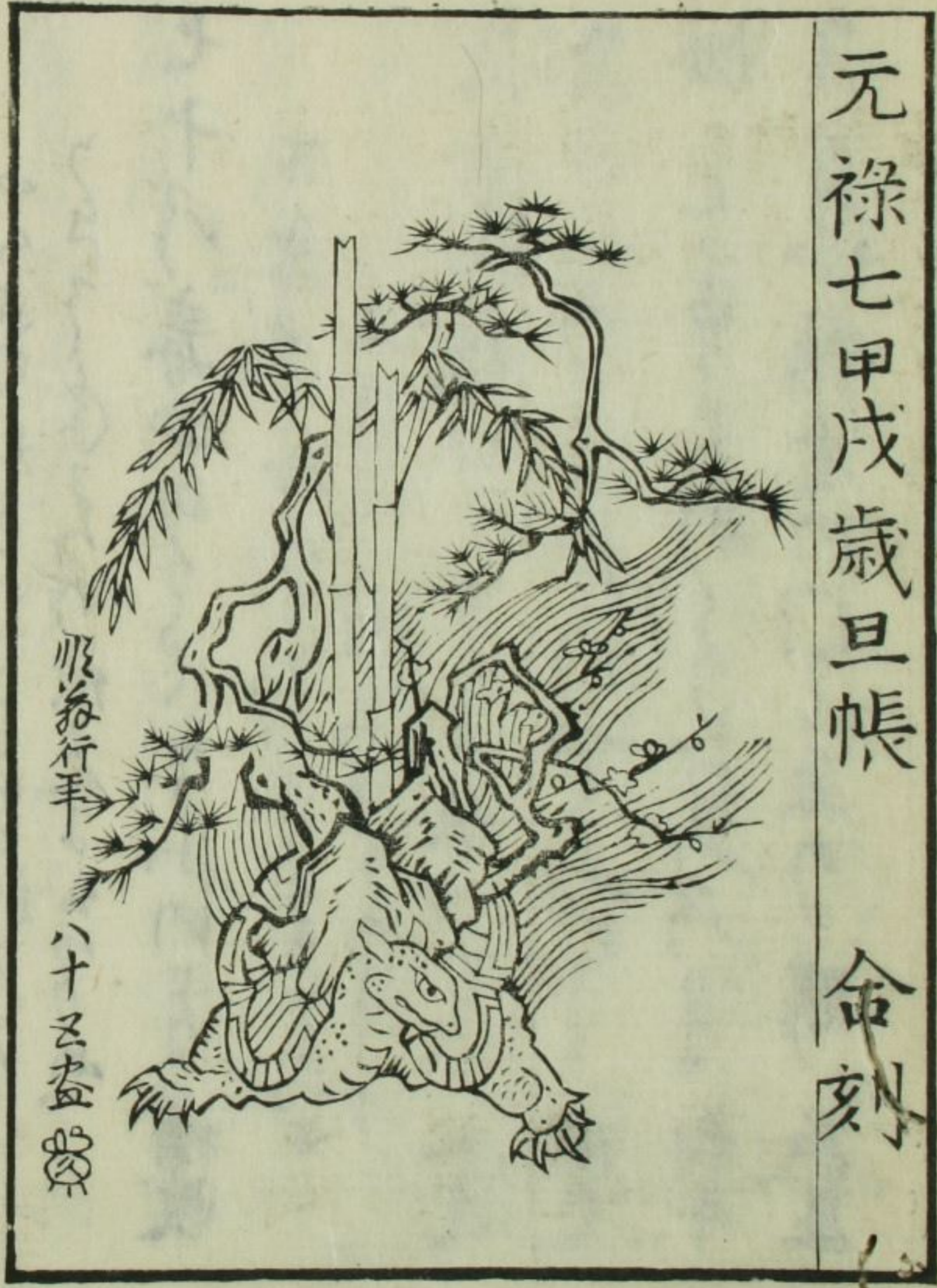
七十の毒やのうさくさくさの月 神叔

万葉集 卷のさかしくさくさくさ
あひのりひらつとくさくさくさ

名月やウツクシ焼わくさくさ船つとくさ 介我
笛フエゆひのくさくさくさくさくさ 周丈
蛤をゆいで剥きりけり月 利牛
名月や隠者の門く魚の 膳 孤屋

元祿七甲戌歳旦帳

金刻



服箱行年

八十五番

年山如家
終之星月夜

其用

筆一 死 毒を

多む 國 象

介我

春之雪 茶通の

岩羽

山より 見を

松風

夕これの 町

彫棠

遊をせし 写あり

横元

秋午あり くらと

芭蕉

其の 明も 身い あり

精の さざ け 物

仙化

帆を 八合 け

仙化

三十一 西元

みぢうらうらう道菜の厨子配
舟の橋の山位あり松檜
成長れ恩づくさくとつ松
か子副や奥を返るよ男

元日

いつちまよふ奈あふ家と傍竹
鏡山まのあま志くぬ男
門書や細代の杭く乾家
某子や他くぬ家の眉こもり

昔人の帳をくさり口をぬ

長板ふ身を途あるちる奈
まらうらいつくも利根の場
とそ拭まう向わ初や孫孫
はるのま武蔵純をうけと
つ松のやうらふはれ深山川
沖のあまのあめ秋き
をうらや沖は帆をよめ舟の板
初礼まの袖はきよの毒
神詠を待文を待日の出
まよとの先今日をねまらり
去はれに判はれぬ日乾

岩翁

岩泉

淳萍

亀翁

枳風

仙化

介我

彫棠

揚水

探泉

横儿

金峯

神叔

箇指

山蜂

湖月

松吟

秋色

平破

舞類

出勤をせうく

山松や出仕初の橋をのり

八橋

其一

わさあれこよ味^{カバ}なる手姫
簪をばし^{カッラ}らる梅の薫
緑^{カッラ}ら髪^{カッラ}の未を引控て

肅山
藩羅
黄山

二

朱初や千里の外よ馬の色
多る追まら^{カッラ}むれ世ん
辰^{カッラ}の月^{カッラ}食^{カッラ}る^{カッラ}より^{カッラ}碎^{カッラ}出^{カッラ}く

同
肅山
藩羅

松崎^{カッラ}く^{カッラ}の^{カッラ}暇^{カッラ}を^{カッラ}かく^{カッラ}屋^{カッラ}姫
鳥の^{カッラ}多^{カッラ}る^{カッラ}夜^{カッラ}や^{カッラ}も^{カッラ}小^{カッラ}笛^{カッラ}竹
ま^{カッラ}合^{カッラ}吹^{カッラ}魚^{カッラ}袋^{カッラ}れ^{カッラ}光^{カッラ}を^{カッラ}あ^{カッラ}ら^{カッラ}せ^{カッラ}や

同
黄山
肅山

雪も梅も廿日の夜の^{カッラ}ゆき^{カッラ}外
猿^{カッラ}の^{カッラ}橋^{カッラ}を^{カッラ}こ^{カッラ}の^{カッラ}日^{カッラ}や^{カッラ}自^{カッラ}忘^{カッラ}
白^{カッラ}の^{カッラ}垢^{カッラ}を^{カッラ}ゆ^{カッラ}つ^{カッラ}る^{カッラ}妻^{カッラ}の^{カッラ}昏^{カッラ}

肅山
黄山
藩羅

元日

動^{カッラ}の^{カッラ}初^{カッラ}九^{カッラ}辰^{カッラ}を^{カッラ}あ^{カッラ}ら^{カッラ}ぬ
初^{カッラ}の^{カッラ}大^{カッラ}早^{カッラ}の^{カッラ}孫^{カッラ}も^{カッラ}玄^{カッラ}関^{カッラ}地

行^{カッラ}の^{カッラ}行^{カッラ}
平^{カッラ}崎



七十四卷

秋香園

扇舟の影 射初のつる 藪を去
 川中や簀の塔をけりしむき
 練赤人氣は去ぬすりすく
 解きくはいつも衣さき初
 糸初や貝のぬけしる 鞍沈
 大廣る星の位や日の初
 女初君をねむふ影の膳
 鳴りや声よある赤老見丸
 織女のやをむを初
 唐の鏡をむく子朝のあ

龜山 鼓角 湖風 銀杏 杜若 江楓 秋香 龜山

顛穢月清吟

名月如山乃懐海のまへ汝章

天下皆回一抱ひや月さふん 緑志

萩の名であられてお建事もの軸 汝幸

糸萩の夜こそまて了錦か 翁雨

清平あまあまふんこられ萩 故友

掃ありのこまよこまよこまはる遠萩 著明

不二乃て隅田乃要や月こよん 挂舎

深あまをい夜のも萩や萩のをも 成美

あまの萩かたりしあの月 金川

清くの夜をほまつく月さふん 百合

名月や倚りのあま水の面 曾久

暮山のそそ築あやうあのみ月 呂姜

にありあまのそそかり 夜のみ萩 恩下

牛修の河をさかり一麻を拾ひゆて
晋子撰集乃ちうまをまきとて
再板の巧あまをまきとて

萩屋のまきのあやふあふも風花書 班曉

眼のあふふ皆流るあれ月 換指

名もや打てるあか金るほの色 夏木

今も花てるあふのの萩花露 梅勤

蛤の海の色あふ月さるん 拙佐

池わや萩の側萩の色 柴雨

新なる猫もあやたれん 漣石

名月やあふあふあふりさるみ 桂子

名月々羽城かあつてあふ乃萩 宇川

名月々あふあふあふあふ 芋 律山

石干氣を付ふあふの萩の色 乾宇

あふあふあふあふあふあふ 砂益

あふあふあふあふあふあふ 桑雅

あふあふあふあふあふあふ 孤月

あふあふあふあふあふあふ 羽貫

あふあふあふあふあふあふ 龜永

斯、折れと峰枝や砂紋の萩同惜

売帆控々々々裏千萩の千衣 如友

名月や素て無寐の夏合 牛吞

物々ほびて花のまゝ萩の色 麦舟

又清き萩の花をうら衣掛 ミラ大カキ 東里

老僧たみ減りて萩の色 慶佐

我意もかゝるや萩の茎 賢佐

名月やと常々体か後さし 岷江

田舎よりハッル萩の月見花 花 柳花

津あきこころ萩おまや萩の花 七 麩舎

くささ日るまゝ萩の花 ミラ大カキ 文之

名月やと常々一羽地をくささ 有合

いよまお萩のうら萩の花 ミラ大カキ 紫朝

新宅へおもひくささ萩の月 寿東

あ萩の萩の半衣や萩の便 菊駕

指て水底きくささ萩の便 来畝

時一あれ八千本乃結也二成の森馬陵

香喰のく静まつてらあのみ月 為六

指込疑ハ如要やリあはれ月 上豊

先(漕船の送向や新のを 薪江

治身平看の目そりあのみ月 田注

雪下平咲る解み伴あう尔を浦 砂栞

多日之夷の敷乃ゆの〜〜〜 夢州

三秋を根よこわけて清 利休垣 五嶺

梅管抄ハ佐藤や序の杖 砂迪

冬々好そそくや新乃清 貞賀

冬々好そそくや新乃清 貞賀

冬々好そそくや新乃清 貞賀

冬月や朽る梅毛院にさ 在澄

冬月や朽る梅毛院にさ 在澄

冬月や朽る梅毛院にさ 在澄

冬月や朽る梅毛院にさ 在澄

冬月や朽る梅毛院にさ 在澄

増田 呂選 獅半吼窟 徳十

いさよふや十六時午一川流く

滄波

萩咲や花乃河りくわ花れ裏

丁東

やまあや其日ま萩乃

流窓

萩咲や花乃河りくわ花れ裏

連砂

直千踏め花を近き萩原

八虎

きりり肌ハ雪の梢やまの月

暉牛

月乃よと夕まや板戸乃厚小萩

大車

ふゆやかきくくくくくくくくくく

干枝

る月下まの所あり彩はゆ

貞風

まらえとれ相乃本は間やまの月

素英

花乃よと夕まや板戸乃厚小萩

初九

清めくれ月の浦らの世帯萩

龜谷

月乃霜人のとらも

自由

つる月やそののりよはまの月暮

九鳥

峯乃松老の睫やまの月

度外

花乃ほ透人干又萩の花を

関眉

鶴と嵐の付く日午似たり

其尹

上州くまの

多月八日登川二舟を信のたつていふ婦人
萩をちきりてかこころを無難か示す

芝

名月や清殿まてゆき 照合 九阜

新霞千衣志河のや 萩乃尾 杜洲

露まのり 我あ莊の月あふり 柘松

巨燈寺の萩乃尾のまのり

是のよの 露あまきさるの 萩 萬林

名月や今の 霧うまれそこへ又 松十

月は松やまを 登てふれ 萩 一羅

浪千色は けりる 萩乃尾 柘 柘 礎

月待て 酒千 濡さるる まきさるる 硯 硯

日時計 入 九の 入るや 月 二より 爲文

名月や三千万里 月あふり 天佐

景あふり 一とみの 月あふり 亦来

景色ハ画ととめふり 名月 田沙

名月や 我をまわして 日 筆 箕山

名月や 雲くまがけして 名月 其樹

名月や ぬの片ふハ 解く 佐國

氏名 那を大物りあり 名月 莫大

影向ま 寸月や 器乃水の 縁 平 硯

時一 何れハ 矢を片く 水乃月 見 貞 喬

塔のほより堂のへりる 剣の山をめぐる 流のり

書を刻之秋寂集之厚
 角之吟也大抵醉郷に在て出後生を具
 尔獨を如夢陽真強筆にて實を子持も
 己典乃此久し母と兼まは指有公を案
 流不斯染五是醒て物するの地ありす也
 又大突をききらむ也負為る身を廣むる亦
 僥倖と謂つる
 癸卯年平砂



安永二年癸巳秋八月吉日

書肆

江戸本町三丁目

西村源六

京堀川錦小路上町

西村市郎右衛門

梓

